

目的 戦後の著しい生活の変化は、家庭科教育の内容に大きな変革を必要とした。第1報において、昭和22年の「学習指導要領家庭科編（試案）」の内容は、戦前のものと大差なく、衣料窮乏時代の衣生活に対応したものであったことを明らかにした。本報では、昭和27年から昭和32年までの被服教育の内容を、社会との関連において考察する。

方法 昭和31年に出された「学習指導要領家庭科編」における被服分野の内容を検討し、前報との異同を明らかにした。さらにこの時期の社会状態とのかかわりをみるために、雑誌「主婦の友」及び「暮らしの手帖」から衣生活関連の記事をとり出し対応させた。

結果 小学校は昭和22年（試案）以来はじめての改訂であり、中学校は昭和26年版、高等学校は昭和24年版の改訂である。昭和31年の改訂版では、これまでの生活の中の被服から、被服分野が独立して内容が構成されている。主な変化として、①被服製作は洋裁にウエイトがおかれた ②衣生活の改善 ③既製品の選び方 ④配色と組合せの問題 ⑤衣服の保存、防虫剤の使い方などが新しくみられる。雑誌にも「ナイロンのできるまで」「配色と組合せの工夫」「新しいきもの」「洗剤と電気洗濯機」「衣服計画」などに関する記事がみられ、新しい衣生活様式が普及しはじめた様子がうかがわれる。以上のことから昭和31年の改訂は、その後の衣生活の変化を予測して、それに対応するために内容が大きくかえられていることがわかった。